
平常心

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平常心

【Nコード】

N65430

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

未来帆は先生にメトロノームを見せてもらって平常心が大事だと言われた。ところが恋にはそれは難しく。恋愛はどうしても心が揺れ動いてしまいます。

第一章

カッチカッチカッチ

平常心

今日もだ。メトロノームは動いていた。

部活の間中ずっと動いている。それでリズムを取っていた。

「はい、メトロノームを見て」

顧問の先生もそれを言う。場所は学校の音楽教室だ。

「今の動きはどうなってるかしら」

「均等です」

「ちゃんとしています」

「そつよね。だからね」

生徒達の言葉を受けてだ。先生はまた言ってみせた。

「皆もね。ちゃんとね」

「リズムよくですね」

「バランスよく」

「そつよ、安定感よ」

そしてだった。先生はここでこう言うのだった。

「安定感が大事よ」

「わかりました」

「それじゃあ」

「何事も安定感」

また言う先生だった。

「いいわね」

「安定感をつけるにはどうすればいいんですか？」

ここで生徒の一人が先生に尋ねた。

「それには」

「練習よ」

先生の答えは至ってシンプルなものだった。それと共に非常にわかりやすいものであった。そして教育的なものでもあった。

「練習あるのみよ」

「練習ですか」

「そうよ、まずはそれよ」

その生徒だけでなく全ての生徒への言葉だった。

「練習あるのみよ」

「努力ですよ、つまりは」

「それですよ」

「そうよ、それよ」

まさにそれだという先生だった。

「人間は努力あってこそ。そして」

「そして？」

「その次は」

「平常心よ」

それもだというのだ。二番目に来るのはそれだというのだ。

「平常心も大事よ」

「平常心ですか」

「それもですか」

「そう、落ち着いてしっかりと見て考えること」

ここでもシンプルかつ教育的に話す先生だった。どうやらこの先生は教育者として中々できるらしい。少なくとも言うことはわかっている。

「それが大事よ」

「ううん、落ち着いてしっかりとですか」

「それで見えて考える」

「それ何でもですか？」

「勿論」

先生の言葉はここでも確かでシンプルなものだった。

「部活だけじゃなくてね」

「人生の何でもですか」

「努力と平常心」

「それが一番大事ですか」

「そうよ。覚えておいて」

こんな話をしてきた。そしてそれはだ。

二年生の安達未来帆も聞いていた。黒い豊かな髪をかなり伸ばしている。肩を完全に覆っている。目はきらきらとしていてそのうえでかなり大きい。カマボコ形の目をしており大きめの薄い唇を持っている。

背は一六五位ですらりとした身体をしている。その彼女がだ。

暗い顔をしていた。そうしてだ。先生の言葉を聞いて言う。

「平常心って」

その言葉を呟いてまた暗い顔になっていた。

「今の私にはとても」

そんな話をしながら部室から出てある場所に向かう。そこはだ。理髪店だった。そこにいたのは一人のすらりとした長身の若者だった。年齢は彼女よりも三歳程度上だった。髪を奇麗にまとめおり目が爽やかである。小さいその目に爽やかさがある。顔は白く口元の形もいい。見事な美形である。

第二章

その彼を見てだ。顔を真っ赤にさせてしまっていた。何とか店に入ろうとする。ところがである。

「うう、やっぱり」

足が止まってしまった。

「散髪以外で行くのって」

憚れてしまう。それで足を止めてしまったのである。

彼女は困ってしまっていた。どうしていいかわからなかった。

それでだ。部活でもだ。困った顔でいた。

告白した、しかしできない。それで途方に暮れていた。部活でもそうした状況でだ。暗い顔でいた。その暗さは余計に増していた。

先生もそれに気付いてだ。彼女に声をかけた。

「ねえ、安達さん」

「はい？」

「悩みあるのかしら」

「こっ彼女に問うたのである。

「何かそんな感じだけれど」

「それは」

「あるなら言って」

「真面目な顔で未来帆に言う。

「是非ね」

「それは」

「あるのね」

「また言う先生だった。

「じゃあ何かしら。先生でよかったら言って」

「言っつていいですか？」

「未来帆は戸惑いながらもだ。先生に対して口を開いた。

「実はですね」

「どうしたの？それで」
「今好きな人がいまして」
「こう話すのである。」
「実は」
「好きな人ができたのね」
「美容師の人で」
「このことも話した。」
「凄く格好よくて綺麗な人なんです」
「それでその人に告白できないのね」
「どうしても」
「そしてだ。さらに話した。」
「どうしても言えません」
「怖いよね」
「どうしたらいいでしょうか」
「暗い顔をさらに暗くさせてだ。そのうえで先生に対して問う。」
「一体。どうすれば」
「先生言ってるわよね」
「先生は彼女の話をごここまで聞いた。そのうえでだ。まずはこう言
ってきたのだった。」
「いつもね」
「じゃあやっぱり」
「そうよ、まずは平常心」
「出した言葉はこれだった。」
「平常心よ」
「平常心、ですか」
「そう、それを忘れないで」
「こう話すのである。」
「落ち着いて。それで我を忘れず」
「そうして先に行けば」
「それでいいのよ」

「じゃあ告白も」

「前に出て」

先生はこうも話した。

「それでね。告白すればいいから」

「勇気を出してですか」

「いきなさい」

また言う先生だった。

「一歩前に出てね」

「わかりました」

それを聞いてだ。未来帆はまずはこくりと頷いた。

第三章

「それじゃあ」

「やるのね」

「はい、やります」

未来帆は強い言葉になっていた。

「やってみせます」

「頑張りなさい。恋ってのはね」

「恋は？」

「告白してからよ」

未来帆の背を心の手で押していた。

「わかったわね」

「はい、わかりました」

こうしてだった。未来帆はその日早速理髪店の前に来た。意を決した顔でだ。

「よしっ」

理髪店の中に入った。赤い床の洒落た店だ。鏡に様々なものが映っている。店の客に理髪師に椅子に缺にだ。そうしたものが映っていた。

だが未来帆はそれを見ていなかった。そしてである。

あの店員を見つけた。そのうえでだ。

彼の前に来てだ。こう言ったのだ。

「あの」

「僕ですか？」

「はい、貴方です」

背は二十センチ程違う。その相手に対して言うのである。

「貴方にお話があります」

「一体何を」

「あのですね」

心臓が割れそうになる。緊張のあまりだ。しかしここで先生のあの言葉を思い出してだ。何とか我を保って言うのであった。

「お名前は」

「僕の名前ですか」

「はい、何ていいますか？」

彼を見上げてだ。その名前を問うのである。

「お名前は」

「松本といます」

まずは名字からだった。

「松本健斗といます」

「松本健斗さんですね」

「はい」

その彼健斗は未来帆の言葉にこくりと頷いた。

「そうですね」

「私はですね」

未来帆もだ。ここで名乗った。

「私は安達未来帆といます」

「安達さんですか」

「はい」

名乗りからであった。まずはだ。

「そうですね。それで」

「それで？」

「よかつたら今度のお休みに」

言葉が詰まりそうになる。しかしだった。

何とか言葉を出してだ。言った。勇気を振り絞り。

「一緒に。八条遊園地に行きませんか」

「遊園地ですか」

「チケットはもうあります」

言いながら二枚出してきた。二枚である。

「よかつたら」

「僕とですか」

「駄目ですか？」

必死の顔で震えながらもだった。それでも言うのだった。その顔を見てだ。健斗は応えた。その言葉は。

「僕でよかつたら」

「いいんですか？」

「はい、僕でよかつたら」

こう話すのである。

「御願いします」

「私と一緒に」

「ずっと見てましたよね」

何とだ。こんなことを言ってきたのだ。

第四章

「お店の外から」

「えっ……」

「ずっと僕のこと見てましたよね。ですから」

「わかってたんですか」

「はい、実は」

「そうだったんですか。気付いていて」

「それでは」

また言う健斗だった。

「一緒に」

「はい……」

未来帆は笑顔で頷いた。これで全ては決まった。そうしてであった。

先生は未来帆からその話を聞いてた。笑顔でいた。そして言うのだった。

「平常心ね」

「平常心ですか」

「いつもの安達さんだったら緊張し過ぎてとても言えなかったわよね」

このことを指摘したのである。

「そうよね」

「それは」

「けれど勇気を出して言った」

このことも指摘するのだった。

「そうよね」

「はい、それは」

「それがよかったのよ」

「それが平常心ですか？」

「もう緊張してどうしようもなくなっているのを勇気を出して元に戻して」

そして言う言葉はだ。

「平常心を取り戻したわね」

「そういうことなんですか」

「そうよ、そういうことよ」

笑顔での言葉だった。

「わかってくれたかしら」

「ええと」

「頭でわかっていなくてもいいから」

それでもまだというのだ。

「けれどわかったら」

「わかったら」

「それでいいのよ。それでね」

「そうですか」

「そういうことよ。勇気を出して平常心に戻って」

緊張からそこにだ。戻したというのである。

「それで言えて幸せになれたのよ」

「私は、ですね」

「ええ。平常心よ」

またこの言葉をだ。未来帆に対して話す。

「何でもね」

「わかりました」

「見て」

そしてだった。先生はここでだ。あのメトロノームを出してきた。

部活でいつも使っているそのメトロノームを出してきたのである。

それを未来帆の前に置いてだ。また話すのだった。

「メトロノームはいつも動いてるわね」

「はい」

「こうして。いつも決まった動きをして」

「左右に」

「これと同じよ」

こう話すのだった。

「これとね」

「同じですか」

「そういうことよ。このメトロノームみたいにね」

「きちんとした動きで」

「心もしつかりすればいいのよ」

先生は話す。その未来帆に対して。

「わかったわね」

「はい、しつかりと」

「これからも頑張つてね」

笑顔もだった。未来帆に向けたのである。

「このメトロノームみたいに平常心で」

「わかりました」

そんな話をしたのだった。その間もメトロノームは決まった動きをしていた。それこそがであった。まさに平常心そのものであった。

平常心 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6543o/>

平常心

2010年11月2日00時10分発行